

琉球大学学術リポジトリ

アメリカ雛の産卵成績

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 祐一, Matsuda, Yuichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20869

アメリカ雛の産卵成績

現在、日本及び沖縄の養鶏界にうづまいている2つの大きな潮流がある。その1つは、鶏の多数羽飼育であり、他の1つは、アメリカ雛の日本及び沖縄への進出である。

従来の養鶏は、農家の副業的養鶏が主体であつて、千羽以上を飼育する養鶏家は、沖縄では数えるだけしかいなかったが、近頃は、1つの養鶏場で数千羽或は何万羽という多数羽飼育者が増加しつつある。このことについては後日にゆづることにして、このたびは、アメリカ雛について、琉大農場における調査成績を発表し、養鶏家の御参考に供したい。

日本で発行されている多くの養鶏雑誌で、昨年最も多く、且大きく取り扱われた問題は、日本の養鶏界に旋風を巻き起したアメリカ雛の良否についての問題ではなかったかと考えている。アメリカ雛は、強健多産であると考えた人、アメリカ雛の産卵は、それ程優秀ではないが、強健性が日本雛に勝るという人、新しい病気をもつてくるのではないかと案ずる人等、多くの人々によって論じられてきた。然し沖縄における成績については、発表されたことをきかない。

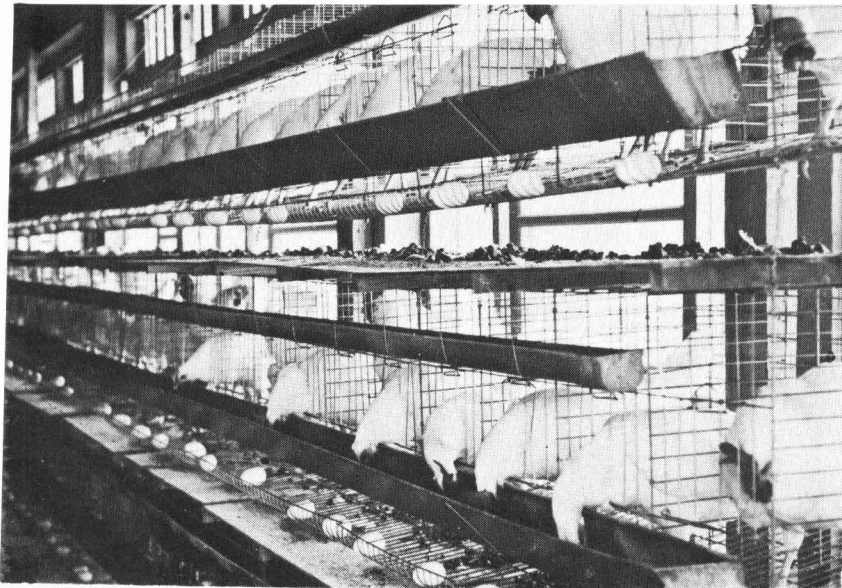
アメリカ雛が、産卵用として沖縄に輸入されたのは、私の知る限りでは、1962年の秋、岡山の池田牧場から玉井飼料店が輸入した、エームス、インクロスと、同年秋、ハイライン農場から、政府の援助で、空輸されてきた、ハイライン1、100羽の初生雛であつたと考える。これらの雛は、政府の種畜場、農林高校、琉大に分譲、飼育されたのであるが、調査した雛は、琉大で飼育した200羽についてである。

ひなの到着年月日 1962年10月17日
育成率 97%

アメリカから輸送されて、到着した羽数は、203羽で、全羽数に対し餌付したが、1週間以内に死んだのが3羽で、残りの200羽は順調な発育を続けたが、外傷のため或は原因は明らかでなかったが死んだのが合計3羽で、結局産卵までに生き残つたのが、197羽であつたから育成率は、 $\frac{197}{203} \times 100 = 97\%$ となった。なお、アメリカの産卵検定では、餌付後1週間以内に死んだ雛は、成績から除外することになっているので、アメリカ式で計算すると、 $\frac{197}{200} \times 100 = 98.5\%$ の育成率となる。

50%産卵迄の日数
157日

50%産卵迄の日数は、アメリカの産卵検定に用いられているもので、ふ化から産卵50%になる迄の日数である。本調査では、10月17日餌付した雛が産卵時迄に生き残つた数が前述のように197羽で、3月22日に118個、翌23日に117個産卵即ち2日続いて、50%以上産卵したので、3月22日迄の日数を計算すると157日



産卵調査中のハイライン鶏

となった。

初産時体重 1, 727g

生存率 98%

50%産卵時に197羽いた若雌は、365日後、即ち今年の3月20日現在生きていた羽数は、193羽であったから、生存率は、 $\frac{193}{197} \times 100 = 98\%$

となる。産卵後365日間に死んだのは、僅かに4羽であった。この場合、産卵成績のよくない鶏が居ても、淘汰せずに飼育したのであるが、現在でも193羽が元気である。

産卵成績は次のようである。

月別産卵率と卵重の変化

	3月 22日-31日	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月 20日迄	平均
産卵率	67.6%	86.8	87.8	80.4	78.7	75.3	73.2	64.2	71.2	72.0	65.5	62.3	62.3	73.6%
一個当 平均卵重	48.8g	48.3	51.8	53.8	55.2	57.7	58.9	60.6	61.8	63.0	64.0	64.8	65.1	57.7g

産卵率は、毎月の総産卵数を、その月の延羽数で除したものである。例えば、4月の飼養羽数は、197羽であったから延羽数は、197羽×30日=5910羽で、総産卵数は、5127個であったから、 $5127 \div 5910 \times 100 = 86.8\%$ の産卵率となっている。365日間を通して産卵率は、73.6%であるから、産卵成績は良好といえる。卵重は、表に示されるように重く、1年後には、平均65gの大卵が実によく揃っていた。全生産卵の平均重量は、57.7gであった。

産卵指数 266.8個

産卵指数は、Hen housed production といわれているもので、一定期間の総産卵数を、その期間の最初の羽数で除したもので、此の調査の場合は、365日間の総産卵数、52,554個で、最初の羽数は、197羽であったから、 $52,554 \div 197 = 266.8$ 個となる。鶏の死亡羽数が多い場合は産卵指数は、非常に少なくなる。

以上を要約すると、琉大で飼育した、ハイライン農場産の雛、200羽についての調査成績は、産卵迄の育成率97%、産卵1年後の生存率98%、1羽当の産卵数(産卵指数にして)266.8個、これを重量で示すと、15.4kgということになる。

この成績は、アメリカで行なわれている産卵調査の平均成績よりも、もっと優秀な成績である。琉大農場

の飼育環境及び飼育法を簡単に述べると、鶏舎は新鶏舎で、中雛、大雛時代の育成は、ケージで行い、産卵を始めた頃に、3段に並べた単飼ケージに移動し、産卵を調査した。鶏舎内の通風は良好で、真夏でも、32度C以上の温度になることは少い。飼料は、市販の配合飼料を、朝夕2回に分けて与え、青菜は給与せず、水は朝1回とりかえ、糞の掃除は、1週2回行った。10月になってから、産卵が減少したので、10月25日から午後8時迄点燈、11月15日から午後9時迄点燈した。

勿論、どの養鶏場で飼育しても、同じ成績が出るとは言えないが、高温、多湿で、産卵鶏の飼育には、不適ではないかと、心配されている沖縄でも、現在、強健多産を目標に改良された鶏種であるならば、アメリカや日本に劣らず、立派な産卵成績が、生まれるものと確信する。この数年、琉大農場では、白血病、殊に肝肥大症に悩まされ、著者は、白血病恐怖症にさえ、なりかかっていたのであるが、今回の調査では、白血病が1羽も出なかつたので、アメリカ雛の強健さを見せつけられたような気がした。昨年の5月に輸入した、ハイライン雛100羽も、1年後の現在、98羽が産卵しているので、この成績も、後日発表出来ると思います。

(松田 祐一)